

「猫と東大。」人気企画が本に お堅い教授の意外な素顔

井上 恵一朗 2020年11月9日 8時52分



ミネルヴァ書房から書籍化される「猫と東大。」



学外向けに大学を紹介する東京大学の広報誌「淡青(たんせい)」(年2回発行)には、異例の人気を博した特集があった。「猫と東大。」。この特集に大幅加筆したものが、間もなく書籍化される。東大といえば、ハチ公。犬との結びつきが強いイメージだが、「猫愛」にあふれた教授らの研究成果が盛りだくさんだ。

この特集が掲載されたのは2018年9月号。当時SNSなどで話題になり、4万8千部発行するうち卒業生らへの送付分を除く約1万部がすべてはけた。

当時の広報室長が特集の冒頭で、「東大の広報誌にあるまじきテーマのゆるさに恐々としていた」と書いている。だが、内容は総合大学らしく文系から理系まで幅広く、本格的だ。

小森陽一教授(現・名誉教授)の寄稿「『吾輩は猫である』に見る『皮膚』の『彩色』の政治学」に始まり、浮世絵などの所蔵史料でたどる猫の歴史、社会学者が読み解く猫ブームの理由……。理系では、東大動物病院が取り組むペットの問題行動の分析や、アルツハイマー病の解明に猫が重要な存在だとする研究などを紹介している。

特集を企画した広報課の高井次郎さん(53)はリクルート出身で、フリーライターを経て7年前から淡青の編集に携わる。当初、「ハチ公と上野英三郎博士像」が農学部そばにあるだけに、縁の深い犬を考えたが、ペット数で犬を上回るなど世は猫ブーム。猫と東大の関係を調べると、想像以上に話題が豊富だった。

中でも「猫を愛し、猫に学ぶ。」と題した教授4人の座談会は、『『淡青』史上最も笑顔にあふれる座談会』に。ペットロスに陥った体験の告白もあれば、猫にパソコンを落とされて学会用の資料が消えてしまい、1週間、猫と陰悪な関係になったとの逸話も。「そんなワイルドさやアナーキーさを痛快に思う自分もいました」

高井さんは「東大ってお堅くてとっつきにくいイメージかもしれないが、そうじゃない先生はたくさんいる。イメージアップという意味でも、猫はいいテーマになりました」と笑う。

淡青始まって以来の書籍化の話は、学術書の出版社・ミネルヴァ書房から舞い込んだ。担当編集者の水野安奈さん(44)は「先生たちの研究には緻密(ちみつ)な論理や冷静さといった、学問としての厳しさが求められる。でもそういった日々の研究を支えているのは、熱い思いだったり、情熱だったりする。その一端を猫という切り口から伝えていて、共感と呼んだのだろう。書籍化を通じて、多くの人に共感を広げたい」と話す。

書籍化に際し、猫型ロボットの研究などを追加。05年の教養学部報に掲載されて感動を呼んだ、駒場キャンパスで愛された猫への追悼文「さよなら、まみちゃん」の全文再録など、大幅に内容を充実させた。11月10日発売予定で、A5判168ページ、税別2200円。(井上恵一郎)

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.